日本語學研究第38輯（2013. 12. 20. pp.59~71）

「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味*

金惠娟**

〈 要 旨 〉

本稿では、「かもしれない」「にちがいない」のタ形のテキストごとの使用傾向と意味を明らかにすることを目的とする。本稿で各テキストの用例を分析した結果、「かもしれない」「にちがいない」のタ形は会話文と新聞においてはほとんど現れず、主に小説の地の文に現れることがわかった。

また、本稿では小説に現れる「かもしれない」「にちがいない」のタ形はほとんど文意を変えずル形に変えられると述べ、この場合のル形とタ形の対立は過去形と非過去形の対立ではなく、視点の違いであると説明した。この場合のタ形は語り手としての視点(外的視点)から登場人物の心的態度を表すとし、ル形は小説の内部の登場人物の視点(内的視点)から登場人物の心的態度を表すと述べた。但し、話者の判断が明らかに過去に行われていることを表す表現がある場合は、タ形をル形に変えることができず、この場合のタ形は、過去時における判断を表すと述べた。つまり、本稿では、「かもしれない」「にちがいない」のル形とタ形は判断時だけでなく、文体の違いや語り手としての視点の違いでも対立していることを用例をもとに明らかにした。

さらに、「かもしれない」「にちがいない」のタ形とル形は判断時や視点などの観点からは異なりを見せるが、「もしかすると」「きっと」などとの共起関係から、「かもしれない」「にちがいない」のタ形はル形と同様、それぞれ、「可能性判断」「確信的判断」を表すと述べた。

論文分野：文法
キーワード：かもしれなかった、にちがいなかった、タ形の意味、判断時、視点

1. はじめに

「かもしれない」「にちがいない」は(1)のように、その形式がル形で現れる場合もあるが、(2)のように、タ形で現れる場合も存在する。

(1) 彼は行くかもしれない / にちがいない。
(2) 彼は行くかもしれなかった / にちがいなかった。

「かもしれない」「にちがいない」に関する先行研究は主にル形、あるいはル形とタ形の区別をせずにこれらの意味を分析してきた。しかし、(1)のような「かもしれない」「にちがいない」のル形は会話

* 이 논문은 2012년 정부(교육부)의 재원으로 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임.
(NRF-2012S1A5B5A0 7035279)
** 建国大学 非常勤講師、日本語学

www.kci.go.kr

においては自然に使われるが、(2)のようなタ形では不自然であると思われる。そこで、本稿では、今までほとんど扱われていなかった「かもしれない」「にちがいない」のタ形を研究対象とし、会話、新聞、小説に現れる「かもしれない」「にちがいない」のタ形の出現傾向を調べる。そして、「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味を判断時と視点の観点から分析し、その場合のタ形のタの意味を考察する。

2. 先行研究

仁田(1989)は「かもしれない」「にちがいない」のタ形の「かもしれなかった」「にちがいなかった」はもはや発話時の心的態度を表すものではないと述べた。そして、これらが表しているものは、「心的態度や心的態度にかかわるものであるにしても、もはや心的態度の表明そのものといったものではなく、客体化された態度の存在やそういった心的態度を起こさせる客観的な世界といったものへと移っていっているものと思われる(p.37)」と説明した。

(3) 日ごろからの記者においかけまわされているうっぷんをはらわしているのかもしれなかった。
(天使)(仁田(1989) p.36)

しかし、仁田(1989)のタ形の説明は抽象的であり、用例をもとにした具体的な記述が必要であると思われる。また、仁田(1989)に従えば、「かもしれない」「にちがいない」のタ形は「過去時における」客体的表現になると思われる。しかし、庵(2006)でも指摘されているように、モダリティ形式のタ形は(4)(5)のように判断時が現在時の場合もある。

(4) いまに新薬が出来るから。その時までがんばるんだよ。とはげましたけれど、その薬があまりに高価だったら、買えないとも思っていた私だった。今思えば、耳に膿がたまったのも、私の仕送りが遅れたからかもしれなかった。
(http://www.bangkokshuho.com/aechive/1997-2000/articles)

(5) しかしそれは、その人が「信頼するに値する人ではなかった」ということじゃない。私が究極にビビリだっただけ。今思えば、その人のことをじゅうぶん信頼できたはずだった。
(http://ameblo.jp/jejeje/)

(4)(5)は判断時が現在であることを表す「今思えば」とモダリティ形式のタ形が共起している場合であり、「かもしれない」「はずだ」のタ形の判断時は、単に「過去時における」ではないと考えられる。

丹羽(1992)は「かもしれなかった」「にちがいなかった」は「話し言葉では用いられない傾向が強い[中略]これらは書き言葉、それも小説や回想記など「語り」に専ら用いられる(p.16)」と述べた。

www.kci.go.kr

(6) a あいつはいくかもしれないね。
b あいつはいったかもしれないね。

c ?あいつはいくかもしれなかったね。
d ?あいつはいったかもしれなかったね。(丹羽(1992) p.16)
(7)?きっと心配しているにちがいなかったよ / いたにちがいなかったよ。(丹羽(1992)p.16)

庵(2006)も丹羽(1992)と同様、「かもしれなかった」「にちがいなかった」は話し言葉や評論などにはほとんど現れず、専ら小説などの語り物に現れると述べた。

(8) 彼女はその年七十一歳に達していた。もう働くには無理な年齢といえたが、彼女は至極達者で、女中たちにこまごまと指図をしたり、自ら綻び物をつくろったりするのを誰もやめさせるわけにいかなかった。しかし夏のくる前ことから-あとから考えれば-めっきり深く皺が刻まれ、あまつさえ持続する不快感に襲われているようだった。いや、彼女を苦しめた腹部の痛みはとうにその頃から存在していたにちがいなかった。(北杜夫「楡家の人々」)(庵(2006) p.144)

庵(2006)は「かもしれなかった」「にちがいなかった」がもっぱら語り物に現れるとは指摘しているが、その場合の「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味については具体的に分析していない。

本稿では、仁田(1989)、丹羽(1992)、庵(2006)の問題点を踏まえ、「かもしれない」「にちがいない」のタ形の使用傾向と意味を用例分析を通し、実証的に考察する。そこで、本稿では「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味を会話、新聞、小説の用例から分析し、その場合のタ形の意味を考察する。

3. テキストの種類によるタ形の使用傾向

本節では、会話、新聞、小説に現れる「かもしれない」「にちがいない」のタ形の使用傾向を調べる。

丹羽(1992)、庵(2006)でも指摘されている通り、「かもしれない」「にちがいない」のタ形は会話においては使われないと思われる。

(9) * 雨が降るかもしれなかったよ / にちがいなかったよ。

また、本稿で毎日新聞2000年の1年間のデータから「かもしれない」「にちがいない」のタ形を調べた結果、「かもしれなかった(かも知れなかった)」は9例、「にちがいなかった(に違いなかった)」は6例見つかった。

(10) 荒れたピッチになれば、グラウンダーのパスは微妙に乱れる。パスで組み立てる日本のサッカーが狂うかもしれなかった。もう一つは南アフリカのスピードだった。(9月15日)
(11) 生涯、独身を通した、そして学術書以外の財物にまったく淡白だった、小池の生きざまの秘密が隠されているのかもしれなかった。(7月23日)
(12) この3年間、何度、ベッドの松本にあいさつしたろうか。洒落(しゃれ)者が、そんな姿を見せるのは苦痛に違いなかった。(3月2日)

www.kci.go.kr

(13) なぜ、こんな事故が起きてしまったのか。ロシアの人々は、この歌を聞きながら自問自答したに違いなかった。「我が軍は最新鋭の原潜を持ちながら、なぜ(救助の)潜水チームがいないのか」。セレズニョフ下院議長は疑問を発した。(8月23日)

新聞においては(10)~(13)のように「かもしれない」「にちがいない」のタ形が使われる場合もあるが、2002年1月~5月までの5ヶ月間の毎日新聞において「かもしれない」「にちがいない」のル形がそれぞれ10500例、210例見つかったことと比べると、新聞における「かもしれない」「にちがいない」のル形とタ形の使用の差は明らかである。

会話において「かもしれない」「にちがいない」のタ形が使われないのは、「かもしれない」「にちがいない」のタ形の「過去時における」判断と会話の「現在時における」判断というのが矛盾しているからであると考えられる。また、新聞において「かもしれない」「にちがいない」のル形がタ形より遥かに多く使用されることから、「かもしれない」「にちがいない」のタ形は、書き言葉の中でも主に小説において現れると考えられる[1)]。

「かもしれない」「にちがいない」のタ形は会話や新聞においては使われない(使われにくい)のに対し、次節で述べるように、小説においてはよく使われる。

(14)「動くな、あぶない」と大声で制止して立ちどまり、煙が散って行くのを待って、見通しをつけると足ばやに歩いていく。歩く時間より立ちどまっている時間が長かったかもしれなかった。(黒い雨)

(15) 三原がそう言うと、主任もうなずいた。彼も同じ気持ちに違いなかった。(点と線)

以上、会話、新聞、小説における「かもしれない」「にちがいない」のタ形の現れ方について述べたが、「かもしれない」「にちがいない」のタ形は主に小説において使用されると思われる。次節では、小説におけるル形とタ形の意味を分析し、小説に現れる「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味を考察する。

4. 小説におけるル形とタ形の意味

益岡(1991)は対話文の場合には基準となる時点は原則として発話時であり、述語のタ形は過去の時を、基本形は現在または未来の時を表すのに対し、物語文は表現される時が基準の時点になるとは限らず、物語の事態の時が基準の時点になる場合もあると述べた。また、物語中の事態の時が基準の時点となる場合は、述語のタ形は問題の事態より前の時点を、基本形はそれと同時かそれ以降の時点を表すと説明した。

(16) 母親は、髪に手をやったが、髪は海風に乱れたままだったので、ところどころ歯の欠けた小さな

www.kci.go.kr

1) 新聞において「かもしれない」「にちがいない」のタ形がほとんど使われない理由及び会話、新聞、小説のテキストの違いについては今後の課題としたい。

赤いセルロイドの櫛を懐から出して手早くすいた。着ているものはふだん着である。白粉気のない顔が、日に灼けた胸もとにつづき、つぎだらけの上下のもんぺに、下駄をはいた素足につづいている。浮き上がるときに海底を蹴る永い海女の習慣から、何度も傷づいて丈夫になった足指は、硬化して鋭く湾曲した爪を持ち、決してその形は美しくはないが、地を踏まえているときにも、確乎としてゆるがない足である。(益岡(1991) p.160)

益岡(1991)は(16)は「最初の文が表現時を基準時点にしているのに対し、残りの文はいずれも事態のときを基準時点にしているものと考えられる(p.160)」と述べた。また、益岡(1991)はこのような基準時点の移動という特徴をカメラの遠近の調節に譬え、物語中の事態の描写について、カメラを引いて事態の動きを描写するロング・ショットと、距離を近づけて事態の細部を描写するクローズ・アップがあるとした。そしてロング・ショットでは表現時を基準時点として事態を距離を置いて眺めることになり、クローズ・アップではロング・ショットで捉えた物語中の事態の時を基準として別の事態を眺めることになると説明した。また、物語の叙述の主眼は筋の展開の描写であり、この場合はロング・ショットでタ形が基調となるのに対し、付帯的な状況を描写する場合はクローズ・アップで基本形が用いられるのが基調となると指摘した。(16)においては最初の文が表現時を基準時点にしており、タ形が用いられているのに対し、後続の3つの文はその時点での付帯的な状況を詳細に描写しており、この場合は基本形が用いられていると説明した。

また、工藤(1993)は〈かたり〉のテクストにおいての過去形と非過去形の対立は〈視点〉の対立が前面化してくると指摘し、〈物語世界外の視点から〉〈過去のこととして〉表現する時には過去形が採用され、同じ出来事を〈物語世界内の視点から〉とらえる時には非過去形が採用されると説明した。また、作中人物の内的意識の提示は意識の現在を基準軸とする〈内的発話〉として、非過去形で直接的に再現されるのが基本的であるが、過去形をあえて使うことによって作中人物から距離をおいたかたちで、作中人物ならぬ〈語り手〉の〈外的視点性〉を入れ込むことができると述べた。

(17) この山が、マチ子の手紙に必ず書かれている富士かと思うと、浅井はこれまでとはまったく違った感慨で眺めることができた。本当に白い。頂から裾野まですっかり雪で掩われている。
(不信のとき)(工藤(1993) p.49)

工藤(1993)は(17)のような〈かたり〉のテクストにおける非過去形の〈眼前描写性〉使用は〈作中人物〉の知覚性であるとし、非過去形を過去形にかえれば〈語り手の外的視点〉から〈客観的に〉出来事がとらえられることになると述べた。また、非過去形を使用すれば、作中人物の内的知覚体験として、〈内的人物の内的視点〉から〈主観的〉に出来事が表現されることになると説明した。また、このような〈外的視点〉〈内的視点〉は作中人物の心理描写においても現れると指摘した。

(18) 吟子は心の中で叫び続けた。今1度生きている母に会って許しを乞いたかった。話せば今ならきっと分かって呉れたに違いなかった。母は心では吟子をとうに許していたかも知れない。
「お前の顔は2度と見たくない」と言いながら、吟子が東京へ出立する朝、母は自分で貯めた小金とお守りを渡して呉れた。もしかするとあの時から母は言葉とはうらはらに吟子を許していたの

www.kci.go.kr

かも知れなかった。(花埋み)(工藤(1993) p.56)

工藤(1993)は(18)の非過去形は作中人物によりそったかたちでの直接的再現を行っているが、過去形は作中人物から距離をおいたかたちでの内的意識世界の客観的＝外的描写を行うと説明した。

また、工藤(1995)はモダリティ形式を中心として、内的意識世界の提示部分において過去形と非過去形の転換現象が起こると指摘した。

(19) 次の日の朝、彼はおそく起き、駅の近くの安食堂で、食事をしたあと、手帳を開いて、真田真平の電話番号をもう1度確かめた。そして食堂の釣銭の中から、10円銅貨を握って、外へ出た。自分はその電話をかけなければならない。しかし誰か出て来るか分からないのだった。あの母親が出て来るかも知れなかった。出るのが女中でも彼は困惑するだろう。色々な形の応答を彼は考えた。結局、ほかの誰かが出たら自分の名を告げてたか子に用があると淡白に言うほかはなかった。(氾濫)
(工藤(1995) p.193)

工藤(1995)は(19)の下線のそれぞれの文は、時間的意味を変えないままに(19')のように言い換えることができると述べた。

(19') ・自分は(彼は)その電話をかけなければならなかった。
・しかし誰か出て来るか分からないのだ。
・あの母親が出て来るかも知れない。
・結局、ほかの誰かが出たら自分の名を告げてたか子に用があると淡白に言うほかはない。

工藤(1995)は(19)と(19')について、意識の直接的再現である〈内的独白〉であれば非過去形を使用しなければならないが、あえて過去形を使用するとすれば、作中人物の意識の〈対象化〉がおこってくると説明した。

以上、益岡(1991)、工藤(1993)(1995)を述べてきたが、益岡(1991)のクローズ･アップは工藤(1993)の〈内的視点〉と通じ、益岡(1991)のロング･ショットは工藤(1993)の〈外的視点〉と通じるものがあり、小説に現れる非過去形(ル形)と過去形(タ形)は小説の外から語るのか内部から語るのかによって区別され、使用されると思われる。次節では、益岡(1991)、工藤(1993)(1995)を踏まえ、小説における「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味を考察する。

5. 小説における「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味

本節では、小説に現れる「かもしれない」「にちがいない」のタ形の出現傾向を調べ[2]、「かもしれな

www.kci.go.kr

2)『CD―ROM版 新潮文庫の100冊』(1995)の翻訳作品を除くすべてのテキストを分析対象とした。また、本稿で「かもしれない」「にちがいない」のタ形の出現頻度を調べた結果、作品によって異なりを見せた。たとえば、『一瞬の夏』では「にちがいなかった」が28例現れているのに対し、『黒い雨』では1 例しか見つか

い」「にちがいない」のタ形の意味について考察する。

5.1　小説の会話文に現れる「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味

『新潮文庫の100冊』の「かもしれない」「にちがいない」のタ形を調べた結果[3]、「かもしれない」のタ形は214例、「にちがいない」のタ形は176例見つかった[4]。そのうち、会話文に現れた例は(20)(21)の1例ずつだけで他はすべて地の文に現れた[5]。

(20)「それをあなたは誇ってもよい筈です」
「誇る?もし、日本人たちが、私の教えた神を信じていたならな。だが、この国で我々のたてた教会で日本人たちが祈っていたのは基督教の神ではない。私たちには理解できぬ彼等流に屈折された神だった。もしあれを神というなら」フェレイラはうつむき、何かを思い出すように唇を動かした。「いや。あれは神じゃない。蜘蛛の巣にかかった蝶とそっくりだ。始めはその蝶はたかしに蝶にちがいなかった。だが、翌日、それは外見だけは蝶の羽根と胴とをもちながら、実体を失った死骸になっていく。我々の神もこの日本では蜘蛛の巣にひっかかった蝶とそっくりに、外形と形式だけ神らしくみせながら、既に実体のない死骸になってしまった」「そんな筈はない。馬鹿げた話をもう聞きたくない。あなたほどこの日本にはいなかったが、私はこの眼で殉教者たちをはっきり見た」司祭は手で顔を覆うようにして指の間から声を洩らせた。(沈黙)

(21) 寄場における賞罰は、すべて町奉行の許可を得なければならないからだ。そして栄二は、この部屋へ押籠められたのである。
「おまえが小島や下役人の名を出さず、博奕のことも口にしなかったのはよかった」と岡安は続けていた、「--もしもこれらのことが明らかになったら、もともと寄場の制度に反対な成島どのは、町奉行へどんな進言をするかわからないし、そうなれば事は、この寄場の存廃にかかわるところまで発展するかもしれなかった」(さぶ)

(20)は「にちがいない」のタ形が現れているが、その理由は「にちがいない」のタ形を含む文が「始めは」で始まっており、また、次の文で「翌日、~死骸になっていく」が続いていることから考えられる。この場合の「にちがいない」のタ形は過去形における判断を表すため、タ形が使用されたと考えられる。これは(20)の「にちがいない」のタ形を(20')のように、ル形に変えられないことからも補強される。それに対し(21)の「かもしれない」のタ形は(21')のようにル形に変えられ、(20)のタ形とは異なる意味を

らなかった。さらに、『野火』では「かもしれなかった」が19例あったのに対し、『佐々木の場合』では1例しか現れなかった。このように小説の内容や作家によってその使用例に違いが見られる可能性があると考えられるが、これらについての具体的な分析は稿を改めて論じたい。

3) 本稿で「かもしれなかった」「にちがいなかった」に前接する品詞などを調べた結果、これらは名詞、動詞、形容詞など様々な品詞に接続するが特に名詞と「のだ」に接続する場合が多いことが分かった。今後、タ形に前接する表現の特徴について詳しく分析する必要があると思われる。今後の課題としたい。

4) たとえば、「砂の女」で「かもしれなかった」は1例見つかったのに対し、「かもしれない」は72例見つかった。また、「にちがいなかった」は見つからなかったのに対し、「にちがいない」は36例見つかった。このことから小説においても新聞と同様、タ形よりル形が使用されると考えられる。

5) 本稿では、小説に現れる会話も本来の会話と同じテキストであると考えているが、(20)(21)のように小説の会話において現れるタ形は小説の特有の現れであると考えられる。

表すと考えられるが、(21)のタ形の意味については今後の課題としたい[6]。

(20') ＊始めはその蝶はたかしに蝶にちがいない。だが、翌日、それは外見だけは蝶の羽根と胴とをもちながら、実体を失った死骸になっていく。

(21') 「--もしもこれらのことが明らかになったら、もともと寄場の制度に反対な成島どのは、町奉行へどんな進言をするかわからないし、そうなれば事は、この寄場の存廃にかかわるところまで発展するかもしれない」

5.2 小説の地の文に現れる「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味

(22) 誰かが何かの目的のために手間をかけて隅から隅までかたづけたのだ。それは例の記号士の二人組かもしれないし、あるいは『組織』の人間かもしれなかった。

(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)

(23) それは子供らにとって確かに恵まれた日々、昭和の良き時代のとりわけ恵まれた日々にちがいなかった。東北の冷害も思想界の弾圧も、そのほか諸々の黒い雲かげも、大体彼らの耳には達してこなかった。達したとしても理解できなかったにちがいないが。(愉家の人びと)

(22)(23)は「かもしれない」「にちがいない」のル形とタ形が混ざっている例であるが、これらはル形をタ形に変えても、タ形をル形に変えても文意は変わらないと思われる。(22)では「かもしれない」のル形とタ形が使われているが、それぞれをタ形、ル形に変えても「例の記号士の二人組み」「組織の人間」である事態を「可能性がある」事態として捉えているという意味は変わらない。また、(23)においても「にちがいない」のル形、タ形をそれぞれタ形、ル形に変えても、「子供らにとって確かに恵まれた日々、昭和の良き時代のとりわけ恵まれた日々である」「達したとしても理解できなかった」と「確信的」に判断するという意味は変わらないと思われる。

このことから、小説に現れるル形とタ形は一般的な会話におけるル形とタ形とは異なる意味を表すと考えられる。言い換えれば、小説に現れる「かもしれない」「にちがいない」のル形の判断時は必ず「発話時(現在時)」を表し、「かもしれない」「にちがいない」のタ形の判断時は必ず「発話時以前(過去時)」を表すのではないと考えられる。この場合のル形とタ形のテンスの対立は工藤(1995)の視点の違いから説明できると思われる。

また、丹羽(1992)は「語り」においては、「かもしれなかった」が過去の状況の表明と考えられる場合もあるが、多くの場合はそうでないと述べた。

(24) (古高俊太郎。……)新作は、名さえきいたことがない。ひょっとすると、蛸薬師の小間物屋小膳

6) (21)の「かもしれない」のタ形は工藤(1993)(1995)の「語りのタ」や寺村(1984)の「ムードのタ」で解釈される可能性がある。(21)の「かもしれない」のタ形は条件節と共起しており、この場合のタは寺村(1984)の「ムードのタ」とも考えられるが、さらなる考察が必要であると思われる。寺村(1984)は「ムードのタ」を「ある事柄を単に過去の事実として述べるのではなく、過去のことを仮想して推量したり価値判断をしたりするような複雑な話し手の心的状態の反映と思われるタの用法(p.335)」と述べた。

www.kci.go.kr

は、この古高の手先なのかもしれなかった。(司馬)(丹羽(1992) p.23)

(25) 千鳥は自室でベッドに腰かけ、窓を見ながら決心した。彼女を救出してやろうと。彼女に感じた同族意識は的を得たものだった。二人とも幽閉者だったのだ。彼女は父親の監視のもとで自由を奪われているに違いなかった。(島田)(丹羽(1992) p.23)

丹羽(1992)は(24)(25)は、語り手が「新作」「千鳥」の立場に立ち、その場面時現在の事態を推量していると説明し、「かもしれなかった」が「ひょっとすると」などの副詞と共起することからも、推量形式が過去形であっても発話時の判断を表すと述べた。また、過去形と基本形が表す事柄は視点の違いであり、回想視点で叙述する場合は過去形が使われ、共時現在視点[7]で叙述する場合は基本形が使用されると説明した。

また、丹羽(1992)は(24)(25)の「かもしれなかった」「にちがいなかった」は場面時における推量を表すのに対し、(26)の「かもしれなかった」は過去の状況を表していると述べた。

(26)そのときの予想ではうまく行くかもしれなかった(のが)、結果は見るも悲惨だった。

(丹羽(1992) p.27)

丹羽(1992)は(26)の「かもしれなかった」は過去の状況の表明を表すとし、場面時からさらに過去の視点「そのとき」において「予想ではうまく行くかもしれない」と判断できる状況があったことを表していると説明した。また、丹羽(1992)は場面時における推量と過去の状況の表明との区別がしばしば曖昧であると指摘し、(26)の場合において「ひょっとしたら」などとは共起しにくいが、全く共起し得ないわけでもないとし、共起し得るならば、それは場面時からさらに過去の時点に視点が移って、その共時現在・未来視点において推量していると考えることも可能であると述べた。丹羽(1992)は「かもしれなかった」を場面時における推量((24)(25))と過去の状況の表明((26))に分けて説明し、さらに2つの区別が曖昧な場合があるとしているが、本稿では、(24)(25)と(26)のタ形のタの意味の違いについて考えてみたい。(24)(25)の「かもしれなかった」「にちがいなかった」は「かもしれない」「にちがいない」に変えても場面時における推量判断という意味は変わらないのに対し、(26)では「かもしれなかった」を「かもしれない」に変えると不自然な文になると思われる。

(24') (古高俊太郎。……)新作は、名さえきいたことがない。ひょっとすると、蜻薬師の小間物屋小膳は、この古高の手先なのかもしれない。

(25') 千鳥は自室でベッドに腰かけ、窓を見ながら決心した。彼女を救出してやろうと。彼女に感じた同族意識は的を得たものだった。二人とも幽閉者だったのだ。彼女は父親の監視のもとで自由を奪われているに違いない。

(26') ??そのときの予想ではうまく行くかもしれない(のが)、結果は見るも悲惨だった。

(24')~(26')から、(24)(25)の「かもしれない」「にちがいない」のタ形のタは過去を表すタではないと

www.kci.go.kr

7) 丹羽(1992)はその場面時からその場面時現在のことが語られている場合を「共時現在視点」の叙述と呼んでいる。

考えられる。それに対し、(26)の「かもしれない」のタ形のタは過去を表すタであると考えられる。しかし、(26)のように判断時が過去であることが示されている場合以外は、「かもしれない」「にちがいない」のタ形は文意を変えずル形に変えることもできると思われる。この場合のル形とタ形のテンスの対立は工藤(1995)の視点の違いから説明できると思われる。工藤(1995)は内的意識提示部分における非過去形と過去形は〈視点〉の相違であると指摘し、非過去形を使用すれば意識の直接的再現＝内的視点、過去形を使用すれば作中人物の意識の対象化が起こって、内的視点そのものではなくなると述べた。工藤(1995)のように考えると、「もしかすると」「ひょっとすると」と共起する「かもしれない」のタ形のタが過去を表さず、またル形に変えられることも説明できると思われる。

小説に現れる「かもしれない」のタ形の意味は「かもしれない」のル形と同様、「可能性判断」であると思われる。これは、「かもしれない」のタ形が「かもしれない」のル形の場合と同様、「もしかすると」「ひょっとすると」と共起することから考えられる。

(27) 司祭は船からその横潮浦らしい村や港をさがしたが、海も陸も、黒一色に塗りつぶされて、灯一つみえない。何処に村や家があるのかわからなかった。だが、ひょっとすると、ここにもトモギや五島の部落のように信徒たちがひそかにかくれ残っているかも知れなかった。(沈黙)

(28) 加藤は出産費がどのくらいかかるかは知らなかった。ひょっとすると百円も二百円もかかるかも知れなかった。(孤高の人)

(27)(28)の「かもしれない」のタ形はそれぞれ「ここにも信徒たちがひそかにかくれ残っている」、「出産費用が百円も二百円もかかる」可能性があることを表している。

また、「にちがいない」のタ形もル形と同様、「確信的判断」を表すと思われる。これは「にちがいない」のタ形がル形と同様、「おそらく」「きっと」と共起することからも考えられる。

(29) おそらく彼女は、加藤が、例年のように梅雨あけと同時に、活発な登山活動を始めるものと思ったのにちがいなかった。(孤高の人)

(30) 猫のようなネズミ、それは料飲街の壁裏に住む特有の種族だ。彼らはみんな下水管を伝ってそこへでて来たのだろうが、そのなかにはきっと飢えに追われて山や野からもどって来た連中もまじっているにちがいなかった。(パニック)

(29)(30)の「にちがいない」のタ形は語り手あるいは登場人物が「彼女は加藤が例年のように梅雨あけと同時に活発な登山活動を始めるものと思った」、「ネズミの中には飢えに追われて山や野からもどって来た連中もまじっている」と確信的に判断していることを表している。

「ひょっとすると」「もしかすると」「おそらく」「きっと」は過去の事態を表すタ形とは共起しない(しにくい)[8]。これらの副詞と共起している(27)~(30)の「かもしれない」「にちがいない」のタ形のタ

8) これらの副詞と文末形式との共起傾向及び意味については金(2009)を参照されたい。金(2009)では「もしかすると」「ひょっとすると」「おそらく」「きっと」が現れる文の文末形式を分析し、これら副詞の意味を考察した。金(2009)では「もしかすると」「ひょっとすると」は文末に「だろうか」「のか」など〈質問〉〈疑い〉表現は現れるが、「だろう」「らしい」とは共起せず、無標形式で終わりにくいことから、これらの

は過去を表すタではないと考えられる。この場合のタは話者の場面時現在における判断を表すと考えられる。(27)~(30)の「かもしれない」「にちがいない」のタ形とル形は視点の観点から対立していると思われる。

6. まとめ

「かもしれない」「にちがいない」に関するほとんどの先行研究は「かもしれない」「にちがいない」のル形とタ形を区別せず、その意味を分析してきた。また、タ形に関する研究においてもテキストごとに分けて、その意味を分析した研究はそれほどないと思われる。そこで、本稿では、小説、新聞、会話に現れる「かもしれない」「にちがいない」のタ形の出現傾向をテキストごとに調べ、また、その場合の「かもしれない」「にちがいない」のタ形の意味を実証的に分析した。その結果、「かもしれない」「にちがいない」のタ形は会話文と新聞にはほとんど現れず、主に小説の地の文に現れることがわかった。

また、話者の判断が明らかに過去に行われたという表現がない限り、小説における「かもしれない」「にちがいない」のタ形は文意を変えずル形に交替することが可能であり、この場合のタ形は語り手としての視点から登場人物の心的態度を表すと述べた。それに対し、ル形は小説の内部の登場人物の視点から登場人物の心的態度を表すと説明した。つまり、「かもしれない」と「にちがいない」のル形とタ形は判断時だけでなく、文体の違いや語り手としての視点の違いでも対立していると述べた。

さらに、本稿では「かもしれない」「にちがいない」のタ形は文体の違いや語り手としての視点の違いでル形とは対立しているが、「もしかすると」「きっと」などの副詞との共起関係から、その意味においては「かもしれない」「にちがいない」のル形と同様、それぞれ「可能性判断」「確信的判断」を表すと述べた。

【参考文献】

庵功雄(2006)「モダリティ形式のタ形に関する一考察」『日本語文法の新地平2』くろしお出版、pp.137-154
金惠娟(2009)「副詞からみたカモシレナイとニチガイナイの意味」『日語日文學研究』68-1、韓国日語日文學會、pp.75-94
工藤真由美(1993)「小説の地の文のテンポラリティー」言語学研究会編『ことばの科学6』むぎ書房、pp.19-65
――――(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味　第Ⅱ巻』くろしお出版
仁田義雄(1989)「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』く

www.kci.go.kr

副詞は「可能性がある」という意味特徴を持つ副詞であると述べた。また、「おそらく」「きっと」は疑問形と共起しにくく、「だろう」「はずだ」と共起し、無標形式で終わりやすいことから「確信的判　断」を表す副詞であると述べた。

ろしお出版、pp.1-56
丹羽哲也(1992)「過去形と叙述の視点」『国語国文』61-9、京都大学文学部国語学国文学研究室、pp.16-43
益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版

【用例出典】

『CD-ROM版　新潮文庫の100冊』(1995)、新潮社
『CD-毎日新聞』2000、20002年、日外アソシエーツ
検索エンジン：www.yahoo.co.jp、www.google.co.jp
※出典が示されていない用例はすべて作例である。

www.kci.go.kr

〈 요 지 〉

「かもしれない」「にちがいない」의 タ형의 의미

본 연구는 소설, 신문, 회화의 용례를 바탕으로「かもしれない」「にちがいない」의 タ형의 의미를 명확히 밝히는 것을 목적으로 하고 있다. 본 연구에서 각 텍스트별로 용례를 분석한 결과,「かもしれない」「にちがいない」의 タ형은 회화나 신문에서는 거의 나타나지 않으며, 주로 소설의 지문 부분에 나타나는 것을 알 수 있었다.

또한, 본 연구에서는 소설에 나타나는「かもしれない」「にちがいない」의 タ형은 문의 의미를 바꾸지 않고 대부분 ル형으로 바뀔 수 있는 것을 제시하고, 이 경우의 ル형과 タ형의 대립은 과거형과 비과거형의 대립이 아니라, 시점의 차이라고 설명했다. 이 경우의 タ형은 소설의 외부 사람의 시점(외적시점)에서 등장인물의 심적태도를 나타내며, ル형은 소설의 내부 등장인물의 시점(내적시점)에서 등장인물의 심적태도를 나타낸다고 말했다. 단, 화자의 판단이 과거에 이루어졌다는 표현이 명시되어 있을 때에는 タ형을 ル형으로 바꿀 수 없으며, 이 경우의 タ형의 タ는 과거의 판단을 나타낸다고 했다. 즉, 본 연구에서는「かもしれない」「にちがいない」의 ル형과 タ형은 판단시뿐만 아니라, 문체의 차이나 시점의 차이에서도 대립하고 있는 것을 용례를 통해 명확히 했다.

또한,「かもしれない」「にちがいない」의 タ형과 ル형은 판단시나 시점 등의 관점에서는 차이를 보이지만,「もしかすると」「きっと」등과의 공기관계에서「かもしれない」「にちがいない」의 タ형은 ル형과 마찬가지로 각각 '가능성 판단', '확신적 판단'을 나타낸다고 말했다.

논문분야 : 문법
키 워 드 : かもしれなかった, にちがいなかった, タ형의 의미, 판단시, 시점

▣ 김혜연(金惠娟)
건국대학교 시간강사
mahou@hanmail.net

■ 投 稿 日 : 2013년 9월 30일
■ 審査開始 : 2013년 10월 14일
■ 審査完了 : 2013년 11월 13일
■ 掲載確定 : 2013년 11월 18일

www.kci.go.kr